

ケース・スタディの魅力はどこに？*

経営学輪講 Eisenhardt (1989)

Eisenhardt, K. M. (1989). Building theories from case-study research. *Academy of Management Review*, 14(4), 532–550.

佐藤 秀典[†]

はじめに

ケース・スタディは、実証研究の方法として多数を占めるものではない。Gibbert, Ruigrok, and Wicki (2008) によると、経営学分野の主要雑誌 10 誌で、1995 年から 2000 年にかけて 159 本のケース・スタディによる論文が掲載されている。これは同時期の総論文数 2643 本のうちの 6% を占めるに過ぎない。 *Academy of Management Journal*、 *Administrative Science Quarterly*、 *Strategic Management Journal* のトップ 3 誌に限定すると、それぞれ 1.9%、1.3%、3.6% とさらにその割合は下がる。

しかし、Eisenhardt and Graebner (2007) によれば、チャンドラーなどによる古典的な研究だけでなく、AMJ 誌に掲載された論文でも優れた、影響力のある研究がケース・スタディの手法を採用しているとしている。事実、これらの研究を含む優れたケース・スタディは頻繁に引用されるだけでなく、Bartunek, Rynes and Ireland (2006) で調査されたように、AMJ 誌の Editorial Board を対象としたサーベイでは、「面白い論文」として最も多く言及されたのがケース・スタディを行った Dutton and Dukerich (1991) であり、その他に

* この経営学輪講は Eisenhardt (1989) の解説と評論を佐藤が行ったものです。当該論文の忠実な要約ではありませんのでご注意ください。したがって、本稿を引用される場合には、「佐藤 (2009) によれば、Eisenhardt (1989) は…」あるいは「Eisenhardt (1989) は (佐藤, 2009)」のように明記されることを推奨いたします。

[†] 東京大学大学院経済学研究科 kg.hidesato@gmail.com

も AMJ や ASQ に掲載されたケース・スタディが多く選ばれている。このように、ケース・スタディは実証研究の主流の手法とはいえませんが、重要かつ魅力的な研究手法である。しかし、研究手法としての厳密性に疑問が持たれることもある(Gibbert, Ruigrok, & Wicki, 2008)。

では、ケース・スタディはどのような場合に有効なのだろうか。また、他の研究手法と比較してどのような特徴があるだろうか。ケース・スタディを研究方法として用いようとする場合、その意義について確認する必要がある。本稿では、ケース・スタディの方法論的な基礎付けとして最も引用される論文である Eisenhardt (1989) の主張を整理し、Eisenhardt の主張するケース・スタディの位置づけとあり方を検討する。

2. Eisenhardt (1989) によるケース・スタディのアプローチ

2.1. ケース・スタディ・アプローチとは

Eisenhardt (1989) によると、ケース・スタディとは、個別の状況におけるダイナミクスを理解するためのリサーチ戦略である。ケース・スタディは、ひとつのケースを対象とすることも、複数のケースを取り上げることもできる。加えて、企業レベル、産業レベルなど、複数の分析レベルをひとつの研究の中にも含めることもできる。また、ケース・スタディは複数のデータ収集法を組み合わせることができる。例えば、文書資料、インタビュー、質問票、観察などを組み合わせることができ、それらのデータは定性的なこともあれば定量的なこともある。

ケース・スタディは、その使用目的も多岐に渡る。記述的に用いることもできるし、理論の検証に用いることもできる。理論を生み出すために用いることもできる。Eisenhardt (1989) では、特に理論を生み出すための研究手法としてのケース・スタディに着目する。

2.2. ケース・スタディによる理論構築

続いて、Eisenhardt (1989) が主張する、理論構築のためのケース・スタディの具体的なすすめ方を見ていく。彼女によれば、そのステップは9段階に分けられる。

Getting Started

ケース・スタディを行ううえで、はじめに行わなければならないことは、リサーチ・ク

エスチョンの設定である。リサーチ・クエスチョンを定義しておくことで、調査を行う際に「どのような組織を対象にすればよいか」、あるいは「どのようなデータを集めればよいか」を特定することができる。焦点を決めることなく調査を始めると、データの海でおぼれることになる。

同様に、事前に構成概念を明確にしておくことも理論構築型の研究をするうえで役に立つ。理論構築型の研究では、構成概念の事前の設定は一般的ではないが、これを行うことによって、構成概念をより正確に測定することができるようになる。

ただし、リサーチ・クエスチョンや構成概念を特定しておくことは有用だが、それらは仮のものであることも認識していなければならない。研究を進めていく中で、変更される可能性があるものである。

さらに、ケース・スタディを始めるにあたって重要なのは、バイアスを避けるために特定の理論や仮説に拠らない状況ではじめるということである。つまり、研究を始める場合、既存の研究などを参考にして問題とすべき点や重要と思われる変数は明確にしておくべきであるが、特定の変数と理論との間の関係を想定すべきではないということである。

Selecting Cases

続いて問題となるのが、ケースの選択である。理論構築を目的としたケース・スタディの場合、母集団を代表させるようにサンプルを選択する統計的サンプリングを行うのは一般的ではない。このタイプの研究でのサンプルの選択は、理論的サンプリングに依拠して行われることが多い。

統計的サンプリングの場合、サンプルは母集団からランダムに選ばれる。一方、理論的サンプリングの場合、ケースはそれまでのケースを再現するようなものか、理論を拡張するようもの、あるいは理論的なカテゴリーに対応する、極端な例に相当するようなものが選ばれる。そのため、ケースは必ずしもランダムに選ばれる必要はないし、むしろランダムに選ぶべきではない。

Crafting Instruments and Protocols

理論構築のための研究は、複数のデータ・ソースを組み合わせることができる。特に指摘しておかなければならないのは、定量データと定性データの組み合わせである。ケース・スタディの中でその両方を用いることができる。定性データは、定量データ間で明ら

かになった関係を理解し、説明するために役立つ。

Entering the Fields

理論構築のためのケース・スタディの特筆すべき特徴は、データ収集とデータ分析がオーバーラップすることである。このオーバーラップのための重要な手法が現場で生じたことやその解釈を記録したフィールド・ノートである。

よいフィールド・ノートを作成するために重要なことのひとつは、何が重要で何が重要ではないかを事前に判断することは難しいので、印象に残ったことはすべて書き留めることである。もうひとつは、私は何を学習しているのか、このケースはこれまでのものとどう違うのか、といった問いを考えながら作成することである。

データ収集とデータ分析をオーバーラップして進めることは、柔軟なデータ収集につながる。調査の途中で新たな考えが生じ、それが新たな理論の創出につながる場合には、途中でデータ収集の方法を変えることができる。ただし、これは体系的にデータを収集しなくても良いということではない。特定のケースの独自性や、理論を改善できる新たなテーマを生かすための柔軟性である。

Analyzing Within-Case Data

ケース・スタディからの理論形成において、データの分析は中心となるプロセスだが、出版された研究ではデータをどのように分析したかについての記述はほとんどないため、データと結論の間には断絶があり、データから結論を導き出すのが難しくなっている。

分析のための重要なステップのひとつは、ケース内での分析である。まずそれぞれのケースを独立に分析することで、膨大なデータに対応できなくなるのを防ぐことができる。また、ケース間の比較に移る前に個別のケースを分析することで、それぞれのケースの独自のパターンを把握し、それぞれのケースの理解を深め、それがケース間比較を促進することにつながる。

Searching for Cross-Case Patterns

人間の情報処理能力には限界があることから、ケース間の比較を行う際にもバイアスが生じ、誤った結論を導きだしてしまう危険がある。このバイアスを避けるための三つの方策を提示する。

ひとつ目は、ケースをカテゴリーに分け、グループ内の類似点、グループ間の相違点を見るというものである。二つ目は、ケースをペアにして比較を行い、似ているケースの相違点、違うと思われるケースの類似点を探するというものである。三つ目は、データ・ソースでデータを分け、異なるデータからそれぞれ独自の洞察をえようとするものである。

これらの方策の背後にある考え方は、多様な見方を通じて最初の見方を乗り越えるようにすることである。これらの方策により、データとのフィットの良い理論を生み出すことができる。さらに、新たな発見にもつながる。

Shaping Hypothesis

個別のケースの分析や、ケース間の比較によって、仮説的なテーマ、コンセプト、変数間の関係が浮かび上がる。次に行うのは、浮かび上がってきた枠組みとそれぞれのケースを対比し、データとのフィットがどれだけ良いかを評価することである。

仮説構築のためのひとつ目のステップは、構成概念の明確化である。このステップは、構成概念の定義の精緻化と構成概念を測定する証拠の確立の二つのプロセスからなる。これらのプロセスは、仮説検証型の研究で、複数の指標からひとつの構成概念を生み出す場合と似ている。しかし、理論構築のためのケース・スタディの場合、構成概念やその測定が分析プロセス自体から生じる点、複数の指標をひとつの構成概念にまとめる手法がない点が異なっている。

仮説構築のための二つ目のステップは、構成概念間の関係が、それぞれのケースにおいて証拠とフィットしているかを検証することである。このステップも、仮説検証型の研究と似ているが、一連のケースが一連の実験と同じように扱われ、それぞれのケースが仮説を確かめるために用いられる点が異なる。

Enfolding Literature

ケースから浮かび上がってきたコンセプトや仮説を既存研究と比較することも重要である。ケースから導出した理論と一致しない既存研究を見ることが重要な理由は二つある。ひとつは、主張の異なる知見を無視することは、研究結果の信頼性を低くするということである。もうひとつは、主張の一致しない研究を対比することで、新たな知見を得ることができるということである。異なる結果を統合的に説明できる理論を構築すれば、理論の一般化のレベルを高めることができる。

ケースから導出した理論と同じ結果になっている既存研究を見ることも重要である。これにより、より強固で一般的な理論を構築することができ、より本質的な概念にたどり着くことができる。

Reaching Closure

研究を終えるにあたって、考慮すべき重要な問題が二つある。ひとつは、いつケースを追加するのを止めるか、もうひとつは、いつ理論とデータとの間の反復を止めるかである。

ひとつ目の点に関しては、理想的には、理論的飽和に達したらケースの追加を止めるべきということができる。理論的飽和とは、調査済みのものとは異なるヴァリエーションの事象がなくなり、ケースを追加しても新たな知見が得られない状態である。ただし実際には、より現実的な、時間や金銭面での制約も考慮されて終了のタイミングが決まる。

二つ目の点に関しても、飽和に陥ったときに止めるべきということができる、つまり、データと理論の間の反復を繰り返しても理論の改善が見られなくなったタイミングで止めるべきである。

2.3. 既存研究との比較

ここまで見てきたプロセスは、既存研究と類似している部分もある。しかし、いくつか重要な相違点もある。

ひとつ目は、理論構築に焦点を当てた点である。これまでの研究は、理論構築のためのケース・スタディのプロセスについて部分的には提供しているけれども、ここで示したようなフレームワークは提供していないか、もともとそれを意図していない。

二つ目は、事前に構成概念を明確にしておくことなど、新たなアイデアをいくつか追加したことである。

三つ目は、実証主義の立場に立ち、検証可能な仮説や一般化できる理論への志向を持ったプロセスを提示したことである。

2.4. ディスカッションと結論

ここで提示したプロセスの特徴には以下のようなものがある。まず、このプロセスは繰り返しを含むものである。ケース間の比較を行った後にリサーチ・クエスチョンを改めて

設定し直すこともある。また、このプロセスは、データの多様な解釈への分岐と、それをひとつの理論にまとめようとする集約の緊張関係に満ちている。さらに、このプロセスは、データとの強い結びつきを持っている。

・ ケースによる理論構築の強み

ケースによる理論構築の強みのひとつ目は、新たな理論を創出できるという点である。創造的な知見は、対照的な、あるいは矛盾する証拠を併置することから生じる。ケース・スタディによる理論構築は、調査者の先入観によって制限されるという通説があるが、実際には相反する現実の事象を併置することで、他の研究方法と比べてもバイアスがかかる可能性が低くなっている。

二つ目は、理論が検証可能性の高いものになるということである。直接の証拠から離れて創出された理論が検証可能性の面で問題を抱えるのに対し、理論構築のプロセスで構成概念の測定や仮説の検証が行われているため、検証可能性が高くなる。

三つ目の強みは、生み出される理論が実証的に強固なものになるという点である。現実のデータとの強い結びつきにより、現実をよりよく反映した理論になる。

・ ケースによる理論構築の弱み

一方で、ケース・スタディによる理論構築にも弱みがある。ひとつは、構築される理論が複雑になるということである。実証的な証拠を多用するため、詳細だがどこが最も重要なかを分かりにくくしてしまう。

もうひとつは、それぞれの理論は特定の範囲にしか適用できないものになるという点である。かなり特異な現象を説明する、一般化の程度の低い理論になってしまう危険がある。検証可能で、新奇性の高い、実証的に強固な理論になるかもしれないが、資源依存理論や組織生態学、取引コスト理論のような広がりを持ったものにはならない。

・ ケース・スタディの適用性

理論構築のためのケース・スタディが有効な状況とは、対象となる現象についてよく知られていないとき、既存の見方では説明できないような場合である。

このような状況では、既存の文献や実証的な証拠に依存しないので、ケース・スタディによる理論構築が特に適している。ケース・スタディが有効なのは、ある分野における研

究の初期の段階か、すでに調査された分野に新鮮味のある見方を提供する場合である。

・ケース・スタディの評価

ケース・スタディによる理論構築研究の評価は、次の三つの規準から行うことができる。ひとつ目は、「良い理論」を生み出せたかである。良い理論とは、節約の原則、検証可能性、論理的整合性を満たすような理論である。

二つ目は、分析の手順、理論とデータとの結びつきに問題はないかである。ケース・スタディも他の実証研究と同じように、サンプルやデータ収集の手順、分析についての情報を提供する必要がある。

三つ目は、新しい知見をもたらしたかどうかである。理論構築型の研究の目的は新たな理論を導き出すことにあるので、ただの追試に終わることなく、新たな知見をもたらすものでなければならない。

この論文の結論は次の通りである。ケース・スタディによる理論構築は、実証的な証拠との強い結びつきにより、新奇性、検証可能性、実証的強固さの点で強みを持っている。そのため、新しい研究領域や、既存の理論が不適切になった研究領域で用いられるのに適している。

3. ディスカッション

Eisenhardt (1989) の特徴は、実証可能で一般化できる理論の導出に重点を置いていることである。ケースによる理論構築の強みとして述べているように、検証可能な理論を導出できること、理論が実証的に強固なものになることがケース・スタディを理論構築のための研究手法として用いることの意義であると考えている。また、ケースによる理論構築の弱みとして理論の適用範囲の狭さを挙げていることは、裏を返せば理論の一般化を重視しているのととることができる。さらにケース・スタディの評価基準としても検証可能性を挙げている。

これは、実証主義的な立場に立っていることに起因している。立場を共有するものとしては Gibbert, Ruigrok, and Wicki (2008), Yin (1994) などがある。これらの研究では、ケース・スタディを含む研究方法が妥当性を持つか否かを判断する基準として、以下の四つが挙げられている。

構成概念妥当性：構成概念に対して、正確な操作的尺度が確立されている程度（デー

タと概念の関係)

内的妥当性：ある変数間の関係が、他の変数によって生じている擬似的な関係でないものとして確立されている程度（他の理論による説明がどれだけ排除できているか）

外的妥当性：ある変数間の関係が、他の事例にも一般化できる程度

信頼性：同様の手続きで研究を行ったとき、同じ結果が得られる程度

これらの基準も、ケース・スタディから導き出された結論の検証可能性、一般化可能性を重視している。また、単一のケースを用いたケース・スタディをどう位置づけるかについても、同様の背景があると考えられる。

Dyer and Wilkins (1991) は、単一のケースを用いた研究の優位を主張している。この論文では、個別のケースが置かれたコンテキストを重視することを主張しており、その立場から、Eisenhardt の提示する複数のケースを用いたアプローチはそれぞれのケースがおかれたコンテキストに注意を払っておらず、表面的なものになるとして批判している。¹

これに対し、Eisenhardt (1989)、あるいは Yin (1994) では、主な関心は複数のケースを用いた研究であった。彼らの主張によると、それぞれのケースは、個別の実験に相当し、ケースの追加は追試に相当する。また、ケースは統計的サンプリングにしたがって選ぶべきではなく、Glaser and Strauss (1967) のいう理論的サンプリングに従って選ばれるべきということになる。そのため、ケースはランダムに選ばれるべきではなく、事実の追試か理論の追試が行われるように選ばれる必要がある (Yin, 1994)。これらの研究によれば、複数のケースを対象とすることにより、より強固で包括的な理論を生み出すことができるとされている。

このような Eisenhardt らの考え方に対し、ケースを用いた研究について異なる立場の主張もある。沼上 (1995) は、先にあげた妥当性に関する四つの基準に関して、ケース・スタディがどれだけ満たすことができるか検討している。それによると、内的妥当性や構成概念妥当性、さらに研究手続きの明確化という意味での信頼性は確保できるが、外的妥当性や追試可能性という意味での信頼性を満たすことは本質的に難しいとしている。

その上で、沼上 (2000) では、単一のケース・スタディでも社会研究として重要な知見をもたらさうとしている。この研究によれば、経営学を含む社会研究では、不変の法則を確立できる可能性は非常に限定的であるにもかかわらず、Eisenhardt や Yin は一般化可

¹ ただしこの研究には、同じ号に掲載された Eisenhardt (1991) によって、Dyer らの批判は古典を誤って解釈していることによるという厳しい反論がなされている。

能な法則の存在を前提に、それを明らかにするための手法としてケース・スタディを位置づけているという。これに対し沼上は、不変の法則を確立するためではなく、行為システムの記述による、社会現象のメカニズムの解明のための方法としてケース・スタディの意義を認めている。

また、エスノグラフィーによるアプローチも、必ずしも検証可能性、一般化可能性を意図していない。エスノグラフィーは、ケース・スタディと同じものではないが (Yin, 1981)、金井 (1990) がエスノグラフィーを用いた比較ケース分析を提唱しているように、ある種の「ケース」を扱うものとして考えることができる。Eisenhardt (1989) でも、Van Maanen (1988) がバックグラウンドのひとつとして挙げられている。

エスノグラフィーとは、「ある一つの文化の（あるいは一つの文化の中から選択された諸相の）記述による再現である」とされる (Van Maanen, 1988)。文化という社会的に獲得され、共有された理解を明らかにすることが目的となるため、長期にわたって現場に滞在し、現場での理解を深めることが求められる。そのため、二つのネットワーク組織を比較した金井 (1994) のような例もあるが、単独の組織を対象にすることも多い (Kunda 1992)。坂下 (2004) は、エスノグラフィーを、認識論上の反実証主義の立場に立つものとし、エスノグラフィーにおける文化は、成員によって社会的に構成された意味世界であり、それぞれが独特のものであるとしている。

以上で見てきたように、Eisenhardt (1989) は、サーベイ調査などの定量的な実証研究を意識しつつ、一般化可能性、検証可能性を高めるようなケース・スタディのアプローチを提唱している。しかし、ケース・スタディには、検証可能性の高い理論を導出すること以外の利用目的もある。特に、複数の主体の意図が交錯するような複雑な社会現象を説明するメカニズムを明らかにすることは社会科学研究の醍醐味であり、ケース・スタディはそのための有効な方法である。

検証可能性を過剰に意識していることが、Eisenhardt (1989) の論旨を分かりづらくしている。例えば、Eisenhardt (1989) では、ケース・スタディによる理論構築の強みは、検証可能性の高い理論を導出できることであり、それは理論構築のプロセスの中で検証を繰り返しているからだとしている。現実のデータと構築される理論・仮説の間を何度も往復し、現実に即した理論を構築することが重要という主張は理解できるが、「検証可能な理論」を構築するために「検証」を行うという論理には違和感が残る。

「検証可能な理論の導出」を研究の目的とするならば、Eisenhardt (1989) のアプローチ

はいまだその有効性を失っていないといえるだろう。しかし、Eisenhardt (1989) は実証主義的な立場を前面に出しているため、ケース・スタディによる理論導出の方法論的基礎としては一方向からの見方しか提示していない。それは、ケース・スタディの魅力の半分しか伝えていないのではないだろうか。

参考文献

- Bartunek, J. M., Rynes, S. L., & Ireland, R. D. (2006). What makes management research interesting and why does it matter? *Academy of Management Journal*, 49(1), 9–15.
- Dutton, J. E., & Dukerich, J. M. (1991). Keeping an eye on the mirror: Image and identity in organizational adaptation. *Academy of Management Journal*, 34(3), 517–554.
- Dyer, W. G., & Wilkins, A. L. (1991). Better stories, not better constructs, to generate better theory: A rejoinder to Eisenhardt. *Academy of Management Review*, 16(3), 613–619.
- Eisenhardt, K. M. (1989). Building theories from case-study research, *Academy of Management Review*, 14(4), 532–550.
- Eisenhardt, K. M. (1991). Better stories and better constructs: The case for rigor and comparative logic. *Academy of Management Review*, 16(3), 620–627.
- Eisenhardt, K. M., & Graebner, M. E. (2007). Theory building from cases: Opportunities and challenges. *Academy of Management Journal*, 50(1), 25–32.
- Gibbert, M., Ruigrok, W., & Wicki, B. (2008). What passes as a rigorous case study? *Strategic Management Journal*, 29(13), 1465–1474.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New York: Aldine. 邦訳, B. G. グレイザー, A. L. ストラウス (1996) 『データ対話型理論の発見』後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳. 新曜社.
- 金井壽宏 (1990) 「エスノグラフィーにもとづく比較ケース分析 定性的研究方法への一視角」『組織科学』24, 46–59.
- 金井壽宏 (1994) 『企業者ネットワークの世界』白桃書房.
- Kunda, G. (1992). *Engineering culture: Control and commitment in high-tech corporation*. Philadelphia: Temple University Press. 邦訳, ギデオン・クンダ (2005). 榎村志保訳 『洗脳するマネジメント』日経 BP 社.
- 沼上幹 (1995) 「個別事例研究の妥当性について」『組織科学』42(3), 55–70.

沼上幹 (2000) 『行為の経営学』 白桃書房.

坂下昭宣 (2004) 「エスノグラフィー・ケーススタディ・サーベイリサーチ」『国民経済雑誌』
190(2), 19–30.

Van Maanen, J. (1988). *Tales of the field: On writing ethnography*. University of Chicago Press. ジョン・
ヴァン=マーネン (1998) 『フィールドワークの物語』 森川渉訳. 現代書館.

Yin, R. K. (1981). The case study crisis: Some answers. *Administrative Science Quarterly*, 26, 58–65.

Yin, R. K. (1994). *Case study research: Design and methods* (2nd ed.). Newbury Park, CA: Sage. 邦訳, 口
パート K. イン (1996) 『ケース・スタディの方法 第2版』 近藤公彦訳. 千倉書房.

赤門マネジメント・レビュー編集委員会

編集長 新宅 純二郎

副編集長 天野 倫文

編集委員 阿部 誠 粕谷 誠 高橋 伸夫 藤本 隆宏

編集担当 西田 麻希

赤門マネジメント・レビュー 8巻11号 2009年11月25日発行

編集 東京大学大学院経済学研究科 ABAS/AMR 編集委員会

発行 特定非営利活動法人グローバルビジネスリサーチセンター

理事長 高橋 伸夫

東京都文京区本郷

<http://www.gbrc.jp>